

る。⁵¹⁾ そしてデュルケームとモースの二人はこれらの未開人の論理的構造は人間とトーテム、記号 *signe* 事物、呼称と人間との区別が不明であることに存在理由をもってしていると指摘する。⁵²⁾ こうしてデュルケームとモースはレヴィ・ブリュールのいう融即の法則が存すのであるとすれば、それは明確な分類の体系の内部に不明確なものが作動するからなのである、つまり基本的には社会的分類の体系、物的分類体系、宗教的分類体系の間に互酬関係が存することが認められているためである。この平行関係は未開社会にはいたるところに認められからなのである。⁵³⁾ こうして社会を考えるための物的分類と世界を考えるとときの社会的範疇の共同利用という考え方に基づいて分類の社会学は成立するのである。ところでこの歴史的と発生論的再構成は起源の状況から生じた第二の時期にかかわることである。そこでは分類の体系間に相互作用がはじまってくる。これに伴う社会環境の分化がはじまるとそれは分類の体系にも従ってすすめられ、同時に論理的体系を補うようになってくる。⁵⁴⁾ デュルケームとモースはそれをズニ族 *Zunis* において検証していく。そこで分類の体系から分類された事物に考察を移して範疇化の社会学から範疇の社会学へと歩みを進めて、社会的空間と精神的空間への考察へと向っていく。⁵⁵⁾ その点を考察したのが「宗教生活」の序論にとりられた論文「宗教社会学と認識論」⁵⁶⁾ である。そこでデュルケームは「未開社会で社会的空間が分類されているが、「その第二次集団（民族など）の空間において占める位置とそれらの相互関係はそれらの類縁性（*parenté*）とそれらが果す社会的機能の示す類似性と相違によっているというのである。⁵⁷⁾ デュルケームにとっては未開人においては世界空間と部族空間は不完全な形でしか区別されておらず、未開人の精神はそのどちらへも難

く、それを意識せずに移行していく。それ故に精神的混乱によって特徴づけられる原始の状況によって社会的範疇が同じ精神的態度によって自然的範疇となっていくことが説明される。しかしそこに分類の二つの社会的枠が現れてくる。その一つは層位的 *hiérarchique* 関係であり、もう一つは水平的な枠なのである。デュルケームとモースはこの論文で未開人の例としてオーストラリアの原住民の諸部族から諸種のケースをとりあげているが、そこに中国の漢民族における占による分類体系をも未開人のそれとの類似物として論述されて⁵⁷⁾いる点は注目すべき点である。G. Namer はデュルケームとモースのこの労作の結論はレヴィ・ブリュールの問題に対する回答であり、「それは未開人の分類は最初の科学的分類と連続しており、そこに序列的概念体系を含んでいる。自然の領域にはそうした関係は存しないから、それらは社会において考えられたものである。その上、全体性の概念も集合生活における社会的慣行によって与えられない。こうした分類はまさしく科学の作業による」⁵⁷⁾ という。だからこうした分類作業が依存する条件が分類の機能の発生において重要な役割を演じるのである。結局社会は分類体系の直接の構成要素であったが、その形式化については指示もしないし、その再利用についても、分類の論述つまり科学的論述が練成されていく段階や場所については説明しないものと考えられている。⁵⁸⁾

それ故に分類のために使用される言語とその未開人の言語社会的起源の間に相関関係があることを見なければならぬ。デュルケームは分類の構想力に注意をひいている。それで彼は事象の論理的関係を表象するため円形が用いられ、シンボルの循環関係は未開社会の現実の同心円または異中心円内における関係を喚起することになってい

51) G. Namer, *op. cit.*, p. 55

52) *Ibid.*,

53) *Ibid.*,

54) *Ibid.*

55) デュルケーム「宗教社会学論集」(行路社) p. 172-203.

56) 同上 p. p. 185-186.

57) 邦訳「分類の未開形態」pp. 73-80

57) G. Namer, *op. cit.*, p. 57

58) *Op. cit.*, p. 57